

第6章 小楠、維新を見据えて

春嶽の政治顧問として江戸での活動を始めた小楠は、幕臣大久保忠寛や老中板倉勝静かつきよからの信頼を受け、自らの唱える「公共之政」を文久期の幕政改革に反映させていく。しかし、春嶽が改革の眼目として期待した將軍家茂いえもちの上洛は、京都で吹き荒れる尊皇攘夷運動の高まりによって意義を失い、文久3年（1863）3月に春嶽は政事総裁職を辞任し、福井への帰国を余儀なくされる。春嶽と小楠はこの事態を打開するため、「天下に大義理」を通すため全君臣が兵備を固めて上京するという挙藩上洛を実行しようとした。しかし、この計画には藩内の異議が根強く、京都の情勢が不穏になっていたこともあり、春嶽は一転して中止を決断するに至る。「道理」の実現が絶たれた小楠は福井を去り、熊本郊外ぬやまづの沼山津で蟄居の生活を送った。

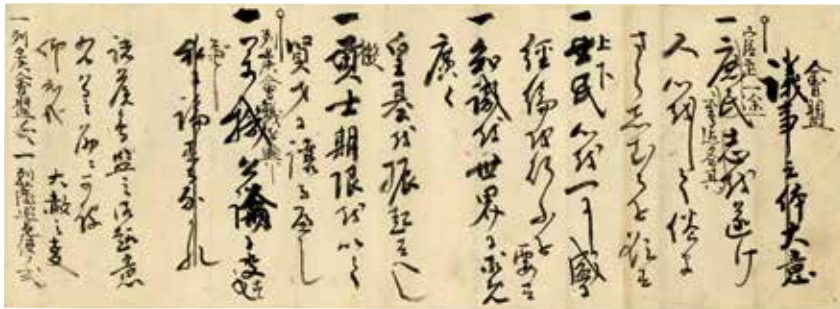
熊本に戻った小楠だったが、時局に対する関心と思索は続き、第二次長州戦争という新たな内憂を機に、小楠と福井藩との交流は再開する。この時に小楠が執筆した「国是十二条」は福井藩と国政の方向性を示す提言として注目され、維新後に小楠は病の身ながらも徴士として明治新政府に登用された。しかし、明治2年（1869）、小楠は大和国十津川郷士たちの襲撃を受け、志半ばで命を落とした。享年61歳。橋本左内の死から10年後の出来事だった。



国是十二条（横井小楠筆） 福井県立歴史博物館蔵

エピソード 受け継がれる意志

日本における統一国家樹立のあり方を早くから見通していた橋本左内の洞察力と、「道理」に基づき「公共之政」を追求した横井小楠の構想力は、現代の歴史学でも注目される幕末期屈指のものだった。その見識と才能は、「常に衆言を聴きて宜しき所に従う」と自らを律した松平春嶽の信頼を得て発揮され、幕末維新期の日本に「公議」「公論」の概念を定着させた。小楠に師事した福井藩士三岡八郎（由利公正）が慶応4年（1867）3月に起草し、五箇条の御誓文の原案となった「議事之体大意」は、その象徴ともいえよう。また、志半ばで世を去った左内に対し、春嶽は晩年まで追悼を続けた。春嶽の没後、左内の追悼は福井県人たちによる顕彰活動へと転化していき、左内は幕末維新期における福井人の活躍を象徴する存在として、郷土福井の人びとに親しまれていくことになる。



議事之体大意（三岡八郎筆） 福井県立図書館蔵

夏季特別展第2会場（1階 松平家史料展示室・館蔵品ギャラリー）

修復完成！橋本左内の書簡集

令和6年7月12日（金）～9月1日（日）

次回の展示（2階 企画展示室）

秋季特別展 鉄の名工

越前明珍

令和6年10月19日（土）～12月1日（日）

展示解説シートNo.170

令和6年7月20日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 0776(21)0489 FAX 0776(21)1489

担当：山田 裕輝

印刷：白崎印刷(株)



福井市立郷土歴史博物館

Fukui City History Museum

展示解説シートNo.170

北陸新幹線福井駅開業／橋本左内生誕190周年記念／
福井市・熊本市姉妹都市提携30周年記念

橋本左内と横井小楠

プロローグ 賢侯・松平春嶽の下に

風雲急を告げる幕末維新时期、福井藩には日本を代表する2人の政治思想家がいた。1人は橋本左内（1834～59）。福井藩に外科医として仕える藩医橋本家の嫡男であり、蘭学修行を通じて最新の知識と合理的な思考を獲得し、将来を嘱望された俊才であった。もう1人は横井小楠（1809～69）。熊本藩士横井家の二男に生まれ、藩校時習館で儒学の研鑽を積み、「堯舜三代の治」を目指し理想的な政治社会の実現を模索する儒学者だった。身分や出身を重視する近世社会において、通常であれば2人が福井藩政に関わることはなかっただろう。しかし、西洋諸国との条約締結、將軍継嗣問題、尊皇攘夷運動、幕長戦争などの内憂外患に苦慮する16代藩主松平春嶽は、諸問題の解決と挙国一致の実現に貢献し得る賢才を求めた。春嶽にその学識を評価され、強い信任を得た左内と小楠は藩政の枢機に関与し、左内は安政期の改革を、小楠は文久期の改革を主導し、福井そして日本の将来を「経綸」（国家を治め、ととのえること）していくことになる。

- | | |
|-------------------|---------------|
| ①松平春嶽肖像写真（幕末期以降） | 当館蔵 |
| ②横井小楠肖像写真（文久元年撮影） | 熊本市（横井小楠記念館）蔵 |
| ③橋本左内肖像画（島田墨仙画） | 当館蔵 |

第1章 左内、福井の地に育まれて

天保5年（1834）3月11日、福井城下の常盤町に生まれた左内は、福井藩に仕える外科医橋本長綱の嫡男として、藩医橋本家を継ぐことを期待されていた。幼少期の左内は書物を好み、大人びた言動を見せる早熟な少年であり、特に学業の上達ぶりは周囲が大きく期待するところとなった。

同時に左内は、武士へのあこがれを隠さない少年でもあった。橋本家は南北朝期の武将で幸若舞の創始者という桃井直詮もものいなおきが祖とされ、さらに父長綱の実家である福井藩医田代家も系図上は関東に本拠を置いた武士であった。田代家の初代当主養仙は、戦国大名朝倉家の旧臣で「野太刀の兵法」を創始した真柄家宗の玄孫宮寿丸だったという。2つの武士の家の末裔に生まれたという自己意識は、左内の中にある武士への憧憬を深く強いものにしていった。

①



②



③



島田墨仙画「橋本左内啓発録を著す図」（版画） 当館蔵



丹頂院殿葬式諸事記（部分） 福井県立歴史博物館蔵

第2章 左内、飛躍の刻

嘉永元年(1848)、15歳になった左内は福井藩の儒学者吉田東篁に入門した。東篁は藤田東湖（水戸藩）、梅田雲浜（小浜藩）、梁川星巖（儒者）、そして横井小楠（熊本藩）などとの交流がある福井藩随一の儒学者であり、左内は東篁の影響を受けて、国事への関心を強めていく。

嘉永2年、左内は蘭学修行のため、蘭方医緒方洪庵が開く大坂の適塾に遊学した。ここで左内は蘭学への非凡な才能を発揮し、藩からの褒賞を受けるなど大きな成長を遂げた。そして嘉永4年5月、諸国遊歴中の横井小楠が大坂に3日間滞在し、そこで左内は初めて小楠と面識を得た。この時に小楠から提案された熊本遊学の話に左内は強く心を惹かれるも、体調が思わしくない父への孝との板挟みとなり、結果的には熊本遊学を断念している。その後、父長綱の病状が悪化し、左内は福井へ帰国、藩医橋本家を継ぐことになる。

しかし、嘉永6年のペリー来航による国内の動揺は、左内に国事への関心を呼び起こした。翌嘉永7年に再度の蘭学修行のため江戸に遊学した左内は、東篁門下の先達である鈴木主税ちからに引き立てられ、藤田東湖や武田耕雲斎など水戸藩の名士たちとの交流を深め、水戸学の思想や歴史観から影響を受けるようになる。蘭学に加え、議論や文章でも卓越した力量を発揮するようになった左内は、藤田東湖や鈴木主税の後を担う人材として、福井藩内外から大きく注目される存在へと成長していった。

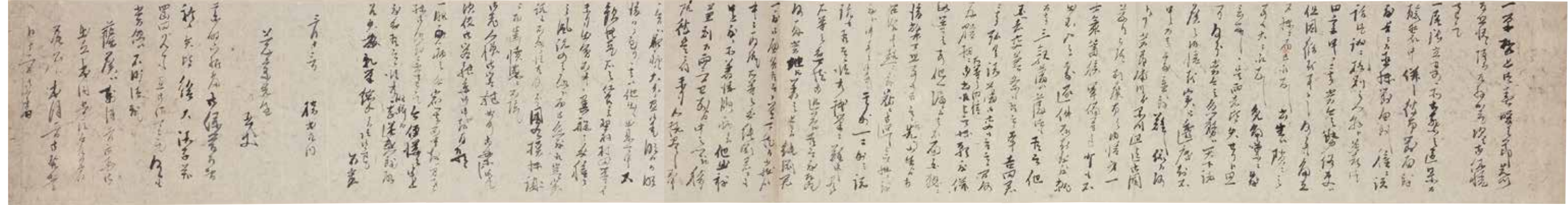
第3章 左内、天下を翔ける

左内の成長をみた藩主松平春嶽は、安政2年（1855）に左内を書院番組に編入し、武士の身分に引き立てた。そして、運営に行き詰まりを見せていた藩校明道館の改革を左内に任せた。春嶽の期待を受け、左内は西洋の実用的な科学技術の導入を重視し、明道館を藩政の課題解決に資す「経済有用」の人材を輩出しうる機関へと変貌させた。そして、左内の改革は民政・財政制度、軍事開発、殖産興業にもおよび、藩政そのものを大きく変えていった。

春嶽から強い信頼を得た左内は江戸に呼び戻され、春嶽が関心を注ぐ將軍継嗣問題に関与していく。安政4年11月、左内は日本が国際社会で独立と影響力を保つためには、積極的な開国・交易と、「日本中を一家と見」る統一的国家体制が必要という構想を披歴した。これは、10年後の明治2年（1869）に明治新政府が制定した政体書でようやく実現したものであり、維新後の体制を先取りする卓越した構想であった。この構想は春嶽だけではなく他藩の人々を魅了し、左内は西郷隆盛（薩摩藩）、三国大学（鷹司家儒者）、岩瀬忠震（幕臣）らと協力し、江戸や京都で政治運動を展開した。しかし、結果的にはこの運動は実を結ばず、その後に吹き荒れる安政の大獄により、左内は26歳という短い生涯を閉じることとなる。



安政5年1月19日 橋本左内宛西郷隆盛書簡 越葵文庫（当館保管）



嘉永7年3月13日 吉田東篁宛橋本左内書簡（「越前関係文書」巻五） 公益財団法人石水博物館蔵

第4章 小楠、熊本と福井の縁

嘉永2年（1849）、藩校設立のため「天下の儒者」を見つけるべく諸国を巡っていた福井藩士三寺三作が、横井小楠の家塾・小楠堂の門を叩いた時、小楠と福井の縁は始まった。小楠の道義論に心酔した三寺は、帰藩して小楠の所論を藩内に喧伝した。それから2年後の嘉永4年、今度は小楠が福井を訪れた際、吉田東篁をはじめとした福井藩の有志たちは連日のように小楠を歓待し、学問について意見を交わした。小楠が帰国した後も福井の有志たちとの関係は続き、嘉永5年には福井藩からの求めに応じて執筆した「学校問答書」を福井に送っている。

この東篁らとの継続的な親交が、小楠の福井藩招聘につながった。小楠の主君である熊本藩主細川斉護なりもりは、松平春嶽の正室勇姫の実父という縁もあり、春嶽は2度にわたり直書を認めて小楠の福井招聘を懇請した。この周旋は実を結び、小楠は福井藩の「賓師」として福井に招聘されることになる。

第5章 小楠、福井の賓師に

安政5年4月に着福した小楠は、さっそく福井藩の人々を魅了した。小楠の道理に基づく国の治め方、外国貿易論、海軍強化を重視する考え方は、すでに橋本左内が藩内で進めていた藩政改革に沿うものであり、福井藩の人々に改革の確かさを実感させた。その一方で、小楠は福井藩に水戸学の弊害が見られることを懸念していた。小楠は安政の大獄による福井藩内の動揺を機に水戸学の払拭に乗り出し、自らの影響力を強めていった。

小楠の影響力が確固たるものとなったのは、万延元年（1860）に噴出した福井藩内の「東北行違」事件である。小楠の思想に結集して理想的な藩体制を目指す動きと、そのためにも新藩主茂昭もちあきを盛り立て体制固めを図るのが先決とする家老たち（北）、それに対する江戸で謹慎中の前藩主春嶽（東）の批判がからんだ三つ巴の激論を、小楠は解決に導いた。これを機に、福井藩内の対立は解消され、藩是「国是三論」が策定された。

小楠の学識と国家論は春嶽に強い感銘を与え、春嶽は小楠に対し強い期待と礼讓をもって接した。文久2年（1862）4月、春嶽は謹慎を解かれ、幕府の政事総裁職として復権を果たした。それに伴い、小楠は政治顧問として春嶽の下に招かれ、幕府や諸藩の立場を超えた「公共之政」の実現を目指していく。



腰巻 黒紅生絹地松竹梅角出亀甲七宝花菱鶴模様(勇姫所用) 福井市春嶽公記念文庫 当館蔵